



Title	F. S.フィッツジェラルドの "Basil and Cleopatra" について
Author(s)	中村, 正生
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1979, 19, p.103-114
Issue Date	1979-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/9693
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-23T20:19:03Z

F. S. フィッツジェラルドの “Basil and Cleopatra” について

中 村 正 生

F. Scott Fitzgerald's “Basil and Cleopatra”

MASAO NAKAMURA

I

「青春」とは、「若い時代。人生の春にたとえられる時期。希望をもち、理想にあこがれ、異性を求めはじめる時期。」¹ の謂である。確かに若者は、生命力に溢れ、希望に燃え、夢見つつ理想にあこがれる。しかし、その反面、未成熟、未経験からくる若者固有の不安、挫折、脆弱さがその中に胚胎しているのも、また、確かである。しかもこの時期に、異性を求めはじめるということになれば、その恋の成行きが、自ずから不安定な様相を呈してくるのは、やむを得ない結果といえるのではあるまいか。F. Scott Fitzgerald は、1928年4月から翌年の4月にかけて、『バジル物語』8篇を出版し、彼の分身である Basil を通して、このような若者の心の動きを巧みに表現してみせた。小論では、この中から“Basil and Cleopatra”² をとりあげ、その構成を分析することによって、この作品の意味を説明するとともに、特に様態の副詞 *suddenly* に言及し、その使用の効果について考えてみたい。

この作品の構成は、4つの章からなっている。前半の2章は、Basil が Cleopatra の如く陶酔している Minnie Bibble から捨てられる、いわば、Basil の《失恋過程》であり、また、後半の2章は、Basil にとって“the greatest ambition of his life”であるフットボールを足掛かりに、Jobena の忠告を容れ、やがて失恋の痛手から立ちあがる《克服過程》をなしている。

II

《失恋過程》 恋があつてこそ失恋がある。Basil Duke Lee は、Miss Ermine Gilberte Labouisse Bibble の方からの差し金で、彼女に会うために南部の町モビルへやってくる。2週間後には、エール大学への入学がきまっている。名誉と美しい恋人と——まさしく両手に

花の得意の絶頂から物語ははじまる。しかし、Basil を迎えに出たその駅頭で、Minnie Bibble の心は、早くも別の若者へと傾いていく。この男こそ Basil の恋敵となる Le Moyne である。しかし、自信満々の Basil には、当初、この男など全く眼中にない。“Did you think he was good-looking?” と女友だちに問われて、Minnie は“He (Le Moyne) was divine.”「彼ってすばらしいわ。」と答えるが、Basil にとっては、彼など“simply a local Southerner”であるにすぎない。³しかし、ついに恋人同志であるはずの Minnie から、ふいに“You’re the best friend I have, Basil.”⁴といわれるに至っては、さすが自信に溢れた Basil といえども、彼女の心境の変化に気づかざるを得ない。friend は友人であって恋人ではない。眼前の彼女は、セント・ポールで再会を約したときのあの彼女ではない。Basil は、はやる心を抑えながら、Minnie と男友だちの1人 Buzz Bailey との関係をたださざるを得なくなる。

“Buzz Bailey!” Her big eyes opened in surprise. “He’s very attractive and a divine dancer, but we’re just friends.” She frowned....He was convinced now that something had occurred in Lake Forest, but he concealed the momentary pang from Minnie.

“Anyhow, you’re a fine one to talk.” She smiled *suddenly*. “I guess everybody knows how fickle you are, Mr. Basil Duke Lee.”

Generally such an implication is considered flattering, but the lightness, almost the indifference, with which she spoke increased his alarm—and then *suddenly* the bomb exploded.

“You needn’t worry about Buzz Bailey. At present I’m absolutely heartwhole and fancy free.” (斜字体は筆者、以下同様)⁵

それまで愛称やファースト・ネームで呼びかけていた恋人が、ある日ある時から、いきなりフル・ネームで呼びかけるようになったら、それは何を意味するだろうか？ いうまでもなく、呼称の変化は心の変化である。Minnie が Basil に Mr. Basil Duke Lee と呼びかけるとき、Minnie の心は、Basil を離れ、別の男性へ（それも、つい今しがた会ったばかりの Le Moyne へ）と移りかけていることを意味する。このあたり、呼称の変化によって、心の変化をそれとなく示唆する Fitzgerald の手法は、心にくいばかりである。

上の引用文には、この作品で初めて *suddenly* が2ヶ所で用いられている。最初の *suddenly* では、<突然> 微笑をたたえることで、一時的に本心を隠そうとし、次の *suddenly* では、<突然> あからさまに自分の感情を、文字通り、爆発させ、しかも、しらばくれている。いずれも恋多き美女 Minnie Bibble の勝気で誇り高く、それ故に、衝動的な性格の一面を端的に

表わしている。⁶ Basilにとって、駅頭での再会のよろこびは、今や、消滅してしまった。いわば、この *suddenly* が1つの節目となって、Basilの《失恋過程》が始まるのである。

さて、Minnie の心変りがはじまっていることは、すでにわかった。しかし、2人の仲は、一挙に決裂してしまうというわけではない。そこに至るまでには、まだ、かなりの紆余曲折を経過せねばならない。Minnie といえども、ある意味で、Basil への未練が残っていないとはいいきれないのだから。その証拠に、その日の午後、いっしょにテニスをしたときなど彼のストロークがすばらしいとって褒め、また、ネットぎわで<突然>ポンと気まぐれに彼の手をたたいたりして、Basil の気持をかき乱す。⁷ そしてまた、Le Moyne が所用ででかけ、しばらく会えないと知ると、Basil を引きとめにかかる。

“Don’t go, Basil. It doesn’t seem as if I’ve seen you a minute since you’ve been here.”

He laughed unhappily.

“As if it mattered to you.”

“Basil, don’t be silly.” She bit her lip as if she were hurt. “Let’s go out to the swing.”

He was *suddenly* radiant with hope and happiness....

“Then do one thing, Minnie,” he pleaded: “Won’t you let me kiss you just once?”⁸

今や、彼女にとって、彼は Le Moyne の一時的な代用品であるにすぎない。しかし、「行かないで……」という Minnie の言葉を聞くと、<突然>、輝くように、彼には希望がよみがえり、幸福感に満たされる。見方によれば、極めて単純だが、これが若さというものであろう。再び、Minnie の愛をとりもどせたのだろうか？そして、彼はその証をキスという形で彼女に求める。彼女は、自分が行くことになっている Miss Beecher’s School への訪問をその初日に許すという交換条件をもち出したりして、Basil の要求をかわそうとする。しかし、<突然>彼は、彼女の手をとり驚かずらにおおわれた涼しく薄暗いサマーハウスの方へと彼女を引き立てていくのである。(… Taking her hand *suddenly*, he pulled her to her feet and toward the summerhouse and the cool darkness behind its vines.)⁹

以上2つの *suddenly* によって、Basil の感情のうねりが、まざまざと表現される。彼女の心変りが、うそであってほしい。彼は<突然>衝動的に彼女の手をとって、その証を奪いとうとする。しかし、失われかけた恋が、力づくでとりもどせるものだろうか？まして、相手は、Basil が Cleopatra にもなぞらえる美女であり、名うての heartbreaker である Minnie

Bibble なのだから。

やがて、エール大学に入った Basil のもとへ極めて衝撃的なニュースがもたらされる。それはまさしく彼の血を凍らせてしまうに十分である。Minnie, Le Moyne をはじめとする数名のグループが北部へ旅行をしたという。しかし、これは Basil が全然知らない事実であった。しかも、列車では、Minnie と Le Moyne が同じコンパートメントにこもりっきりで、検札の車掌とひともんちゃく起こしてしまったというのだ。その車中の場面を想像していくと、Basil の心中には激しい嫉妬の炎が燃えさかる。2人が車中で共有した不幸な出来事にすら、彼は激しい妬みを感じずにはおれない。

このような決定的な事実があったにもかかわらず、Basil は、依然として、彼女をあきらめることができない。かねての約束通り、Miss Beecher's School へと彼は Minnie をたずねて行く。晴れやかに頬を紅潮させながら、いつもよりはるかに神秘的な魅力をたたえて、彼女が姿をあらわすと、あわれ Basil の心臓は、激しく鼓動を打ちはじめるのである。彼女の心は、すでに自分にはないのだと知りながら、なお、彼は Minnie への愛を、将来への夢とともに、語らずにはおれない。

“Minnie, I want to be a great man some day and I want to do everything for you. I understand you're tired of me now. I don't know how it happened, but somebody else came along—it doesn't matter. There isn't any hurry. But I just want you to—oh, remember me in some different way—try to think of me as you used to, not as if I was just another one you threw over. Maybe you'd better not see me for a while—I mean at the dance this fall. Wait till I've accomplished some big scene or deed, you know, and I can show it to you and say I did that all for you.”

It was very futile and young and sad....He sat across the room from her, and Minnie sat on the couch, looking at the floor, and said several times: “*Can't we be friends, Basil? I always think of you as one of my best friends.*”¹⁰

ここには、背を向けかけたかつての恋人に、辛うじて涙をこらえ、額に汗をにじませながら、愛の復活を願う Basil の真剣な気持が若々しい情熱でもって吐露されており、ロマンチックな叙情が溢れている。Minnie にしてみれば、決して、彼に対して背を向けてしまおうというのではない。恋人としてではないが、友人としてのつきあいは保っていきたいというのである。

もちろん、Basil はそんな状態に満足できない。「友人」といえば、Basil から Le Moyne への彼女の心変りをほのめかす最初の言葉 “You’re the best friend I have, Basil.” が、ここであらためて思い出されてくる。彼女の眼前に Le Moyne があらわれてからというもの、彼女にとっての Basil は、もはや、恋人としてではなく、一貫して *friend* として扱われてきていることがわかる。

やがて、ニューヘブーンへもどった彼のもとに Minnie の写真が届く。以前、モビールの町で、2人が1枚ずつ持っておくように写しておいた記念写真の1枚である。しかし、その献呈の辞 “L. L. from E. G. L. B. Trains are bad for the heart.” は、最初、Basil をとまどわせる。

At first the inscription puzzled him: “L. L. from E. G. L. B. Trains are bad for the heart.” Then *suddenly* he realized what had happened, and threw himself on his bed, shaken with wild laughter.¹¹

もとをただせば、これは彼が受け取るべき写真であった。しかし、Minnie から Le Moyne へと献呈されていたのである。＜突然＞事の次第を理解した彼は、激情のおもむくままに、ベッドに身を投げ出し、身もたえしながらかつて物狂おしく笑い出す。

よろこびと悲しみ、期待と失望との間に、激しく揺れ動きながら、Basil は、決定的な失恋という名の奈落へとおちこんでいくのである。以上、これまでの引用例に見る如く、Basil の《失恋過程》を説明するにあたり、*suddenly* という語が、その要所要所で、注目すべき役割を果たしていることがわかる。

III

《克服過程》 Basil は、やっと追試験に合格して、フットボールの練習への参加を許される。しかし、これまでに彼は、新入生のフットボール特別訓練期間の半分を無為に費やしてしまったことに気づく。今シーズンは、エール大学チームの一員として試合に出れる見込みもほとんどないまま、練習に参加して4日目の終りに、Basil は、＜突然＞多数の補欠の中から呼び出される。彼のパスがコーチの眼にとまったのである。

At the end of four days he was reconciling himself to obscurity for the rest of the season when the voice of Carson, assistant coach, singled him *suddenly* out of a crowd of scrub backs.¹²

この *suddenly* によって、Basil の《克服過程》がスタートするのである。

確かに第3章は、その書き出しからしてちがっている。作者 Fitzgerald の筆の動きに、Basil が失恋の痛手からいずれ立ちあがるのではあるまいかとの予測を可能にする音調が感じられる。栄えあるエール大学の学生であることを自覚し、永らく彼の夢を培ってきた精神へ、つまり初心に帰ろうとする試みがはじまる。彼は自分の夢を次のように語る。

“I want to be chairman of the News or the Record,” thought his old self one October morning, “and I want to get my letter in football, and I want to be in Skull and Bones.”¹³

「学生新聞のザ・ニュースあるいはザ・レコードの会長になりたい。フットボールの正式メンバーになりたい。学生クラブのスカル・アンド・ボーンズに入りたい。」と。これは彼にとって、まじない (incantation) となり、以後、Minnie と Le Moyne のことを思い浮かべるたびに、この言葉を繰り返し唱えることになる。そして、徐々に、彼女のことで心を悩ます時間が短くなっていく。前にも触れたように、なによりも、フットボールは彼にとって、“the greatest ambition of his life”¹⁴ である。このフットボールを足掛かりとして、彼は再生をはかろうとするのである。

第3章の大半が、フットボールの試合の描写に使われている。相手は恋敵の Le Moyne が、エンドをつとめるプリンストン大学チームである。試合に先立って、練習中の Basil をのぞいてみると、

Le Moyne was playing end on the Princeton freshmen and it was probable that *Minnie would be in the stands*, but now, as he ran along the springy grass in front of Osborne, swaying to elude imaginary tacklers, *the fact seemed of less importance than the game.*¹⁵

プリンストン大学チームの一員として、Le Moyne が出場するからには、Minnie が、彼の応援のために、恐らくスタンドに姿をみせることだろう。しかし、ボールをかかえ、弾力性のあるグラウンドの芝草の上を走っているうちに、Basil の心の中に1つの変化が生まれてくる。つまり、フットボールの試合に比べれば、Minnie の存在などさほど重要ではないという新たな認識の誕生である。

試合当日、Basil の眼には、恋の勝利者 Le Moyne の姿が、いつもよりも一段とたくましく、その動きも断然すばやく見える。Basil の眼は、衝動的にスタンドへ向かう。しかし、そこに、彼は Minnie の姿を認めることができない。やがてはじまった試合に、Basil は、彼の

全神経を集中する。(…he concentrated all his faculties on the play.)¹⁶ 試合は急テンポで展開する。チームメイトの負傷で出番がめぐってきた。いよいよ Le Moyne との対決である。このあたり、きびきびとした試合運びの中に、Basil と Le Moyne との間に飛び交う感情的な火花をも描きこむ Fitzgerald の筆は冴えている。いわば、この場面は、この作品中の圧巻であり、読む者を引きつけて放さない。しかるに、この場面にも、*suddenly* が2回あらわれて、きびきびとした試合展開を一層際立たせている。最初、Basil は、プリンストン側によって仕組まれた罠にはまって、一挙に15ヤードを失う。

The Princeton team *suddenly* woke up.¹⁷

彼の失敗がもとで、プリンストン大学チームは、<突然>わっと活気づき、得点する。しかし、後半になると、それまで元気だった Le Moyne の顔にも疲労の色が見えはじめ、一方、見事に立ち直った Basil の活躍でエール大学チームは勝利を手に入れる。

Yale 10, Princeton 7. Up and down the field again, with Basil fresher every minute and another score in sight, and *suddenly* the game was over.¹⁸

勝利の瞬間は<突然>にやってきた。しかし、最初の失敗の直後に Fitzgerald は、次のように書いている。

*He got up with his heart black, but his brain cool.... he made himself believe that he hadn't lost their confidence, kept his face intent and rigid, refusing no man's eye. He had made his errors for today.*¹⁹

前半の斜字体部分は、やがて、敗北のあとにくる勝利を暗示している。また、後半の部分（「今日の試合を立派にやるために、これまで色々失敗を重ねてきたのだ。」）は、意味深長である。なぜなら、後で述べるように、フットボールで体得したこの教訓が、やがては、Minnie との関係においてもその終局において生かされてくるからである。それはともかく、以上のように、多数の補欠の中から選手として選抜されたのも *suddenly* であれば、試合での失敗も成功もすべてが、Basil の行動が *suddenly* に生み出した結果であった。

ところで、このフットボールの試合での失敗から成功へという過程には、Basil の Minnie に対する失恋から克服への過程が凝縮されているように思われる。しかも、その折目折目目に *suddenly* という語がそう入され、明確な流れの転換をみせる点は、殊に、興味深い。

さて、Basil と Le Moyne との関係に焦点を合わせてみよう。フットボールの試合後、Basil は彼と顔を合わす。激しい試合のため、彼の顔は腫れあがり、手には包帯をまいている。この事実は、確かに、Basil の彼に対する敵意を幾分和らげはするものの、それでも口をきく気にはなれない。試合には破れても、彼には Minnie があるはずだから。しかし、Le Moyne がいった言葉は意外だった。

“If it’s about Minnie, you’re wasting your time being sore,” Le Moyne exploded *suddenly*. “I asked her to the game, but she didn’t come.”

“Didn’t she?” Basil was startled....

“The young lady kicked me about a month ago.”

“Kicked you?”

“Threw me over. Got a little weary of me. She runs through things quickly.”

Basil perceived that his face was miserable.²⁰

Basil はまさしく<突然>に Le Moyne の失恋を知らされる。そして、端なくも彼女のあきっぽい性格までも知らされることになる。彼女の心は、また別の男性へと移ってしまったのである。かつて Minnie の前に、燃えるような不屈の南部人の眼(*fierce, undefeated Southern eyes*)²¹をして立っていた Le Moyne が、今は *miserable* な表情に変わっていることに Basil は気づくのである。

その夜のローン・クラブ・ダンスの場面を眺めてみよう。会場の入口近くで騒ぎが起こる。どうやらプリンストン大学チームの新生連中の中である。<突然>、その騒ぎの中から奇妙な化物みtainな若者が飛び出してくる。(And now *suddenly* the curious specter of a young man burst out of the commotion,...)²² バックが、ディフェンス・ラインを突破するような勢いである。制止しようとする者を押しつけて、フロアへ上がったその姿は、この上なく奇怪でみじめなものである。髪も服装も乱れ、眼は狂気じみて、足もとはふらついているという始末である。そして、参会者の中に Minnie を見かけると、大声で彼女の名を叫びつつ、駆け寄ろうとする。激しく抗いながらも、多勢の人々に押しもどされていく Le Moyne の姿を Basil は同情の眼で見守る。この作品の中で、我々が Le Moyne を見るのは、この場面が最後である。<突然>、失恋を告白し、<突然>それも化物みtainなあわれな風体で、パーティーに乱入し、Minnie の名前を叫びつつ、失恋の奈落へおちこんでいく Le Moyne — その彼を同情の眼でもって眺める Basil. Fitzgerald は、この2人の若者をきびしく対比させて、読者の前に提示する。Basil は、成長をとげたのである。最初のカントリー・クラブでのダンスパーティーの場面を思いおこせば、作者の意図は明瞭である。あの時の Basil

は、みじめであった。Minnie の心は、Le Moyne に移り、彼は自分の感情を自分で支配できぬままに切齒扼腕していたのであるから。(…for the first time in his life he wanted passionately to be older, less impressionable, less impressed.)²³ なお、Le Moyne に関して用いられた *suddenly* は、以上の2回だけであるが、この語によって、失恋の苦しみおよび失恋後の急激な転落と変貌が、一種のあわれさをもって読む者に伝わってくる。以上、Le Moyne との対比において、Basil の成長を跡づけてきた。彼はフットボールのみならず、Le Moyne にも勝ったのである。

次に肝心の Basil と Minnie との関係をさらに追跡してみたい。そのためには、まず Jobena Dorsey に登場してもらわなければならない。1年前、Basil は彼女と、ほんの短期間だが、恋愛関係にあった。彼は彼女にたずねる。

If a girl who had been “crazy about a boy” became *suddenly* infatuated with another, what ought the first boy to do?²⁴

「ある男性に熱烈に恋していた女性が、＜突然＞別の男に夢中になったとしたら、その最初の男性は如何にすべきか？」という Basil の質問は、この作品の主題を表わしている。しかも、この中に、この作品中で、重要な働きをすると考えられる *suddenly* が含まれているのは、単なる偶然であろうか。この語によって表現される如く、恋心には、このように移ろいやすい一面があるのは否定できない。まして、未熟な若者たちの恋であれば尚更のことではあるまいか。フットボールに打ちこみ、頭では割り切ったつもりでも、Basil は Minnie への恋情をまだ完全には断ち切れずにいる。Minnie の移り気、Basil の動揺。彼の間に対して、Jobena の出した解答は簡潔である。

“You’re too much in love. All that’s left for you to do is to show her you don’t care. Any girl hates to lose an old beau; so she may even smile at you—but don’t go back. It’s all over.”²⁵

全ては終わったと思った。Jobena の言葉が、彼の最後のわずかな希望の灯を消してしまったと思った。彼の眼には涙が浮かぶ。しかし、その後のパーティーで、Minnie を一目見ると、またもや、彼の心は激しく揺らぐ。しかも、耳もとで、“I’m so proud to know you, Basil. Everybody says you were wonderful this afternoon.”²⁶ と、フットボールの戦果をほめられては、たまったものではない。彼女にとって、Basil は、もはや “old beau” である。しかし、Jobena の指摘通り、Minnie は “old beau” としての Basil は失いたくないので

ある。彼女の恋愛に対する考えは、次の如くである。

“You know that when two people aren’t—aren’t crazy about each other any more, the thing is to be sensible.”²⁷

Basil の脳裡には、先刻聞いたばかりの Jobena の言葉 (...there was nothing left except to escape with his pride.) が生きている。彼は答える。“Of course,”... “When a thing’s over, it’s over.”²⁸ と。これは、しかし、Minnie には意外な答であったにちがいない。

“Oh, Basil, you’re so satisfactory. You always understand.” And now *suddenly*, for the first time in months, she was actually thinking of him.²⁹

これまでとはちがう Basil の変化に気づき、初めて、それも <突然>に、Minnie は本当に彼のことを考えはじめる。ここには、恋の痛手から立ち直ろうとする健気な Basil の姿がある。それと同時に、Minnie の眼には、これまでとちがった成長したひとかどの若者として Basil が映じているのである。この *suddenly* を境目にして、2人の立場は逆転する。

Resolutely he refused to look at her, guessing that she had wriggled slightly and folded her hands in her lap. And as he held on to himself an extraordinary thing happened—the world around, outside of her, brightened a little.³⁰

彼女からの甘い誘いを断固として拒否するとき、Basil には、Minnie 以外の世界がほんのりと見えはじめてくる。その彼に新入生たちが群がってきて、彼の活躍を賞賛する場面は、象徴的である。彼にとって、この賞賛には二重の意味がある。ひとつは、もちろん、試合で活躍した Basil に対する賞賛、そしてもうひとつは、これは新入生たちの全く意識せぬことであるが、自分の感情をなんとか自分で制御できるようになった Basil 自身に対する賞賛である。その直後、Minnie からの甘い呼び声に、Basil の心は、また迷う。しかし、迷ったにしても、もう以前の Basil ではない。フットボールの試合で体得したあの精神 (He had made his errors for today.) を彼は忘れなかった。今、ここで、Minnie との訣別に際し、それは、He had made all his mistakes for this time. (「この時点であやまちをおかきぬために、これまで多くのあやまちをおかしてきたのだ。」)³¹ と表現される。今こそ彼は、失恋の痛手を越えて、ひとかどの青年へと成長を遂げたのである。

There was a flurry of premature snow in the air and the stars looked cold. Staring up at them he saw that they were his stars as always—symbols of ambition, struggle and glory. The wind blew through them, trumpeting that high white note for which he always listened, and the thin-blown clouds, stripped for battle, passed in review. The scene was of an unparalleled brightness and magnificence, and only the practiced eye of the commander saw that one star was no longer there.³²

時ならぬ雪まじりの風が吹くヴェランダに、Basil はただ1人歩み出て、夜空を仰ぐ。そこにはいつもながらに、彼にとっての野心や闘争や栄光を象徴する星々がきらめいている。しかし、1つの星が、今ではもうそこにはないことがわかる。Minnieも、Basil にとっては、結局、1つの星であるにすぎなかった。そして、その星は消えた。今や成長を遂げた Basil の眼には、それがわかるのである。そして、この場面の比類ない明るさと壮重さが、彼の成長と《克服過程》の完了とを表わしている。

IV

振り返ってみると、初めて Minnie が Basil の心をとらえるのは、『バジル物語』の中の1篇“*He Thinks He's Wonderful*”においてである。このとき Fitzgerald は、次のように書いている。

It was written that in passage she (Minnie) would come to Basil as a sort of *initiation*, turning his eyes out from himself and giving him a first dazzling glimpse into the world of love.³³

作者のいう通り、Basil にとって彼女は、一種の“*initiation*”であった。彼女によって初めて、Basilは、彼自身の世界から外側の世界へ、眼もくらむばかりの“*love*”の世界へと導かれることになったのであるから。そして、この“*Basil and Cleopatra*”の中で、彼は Minnie に失恋し、その苦しみを克服することによって、今度は、Minnie の外側に新しい世界を発見する。彼の精神は *immaturity* から *maturity* へと進む。“*Basil and Cleopatra*”も Basil にとっての“*initiation*”の物語である。

以上、作品全体を《失恋過程》と《克服過程》とに大別して、主人公 Basil の成長を跡づけるとともに、この作品中の重要語として、特に *suddenly* を選び、考察を加えてみた。*suddenly* の効果的な使用が作品の展開にきびきびした流れを与え、激しいが移ろいやすい若者の恋愛感情を鮮やかに描出することに貢献している。

< 註 >

- 1 【岩波国語辞典】 p.542. (岩波書店)
- 2 F. Scott Fitzgerald, *The Basil and Josephine Stories* edited by John Kuehl and Jackson Bryer (New York: Charles Scribner's Sons, 1973), pp.165-185.
- 3 *Ibid.*, p.167.
- 4 *Ibid.*, p.168.
- 5 *Loc. cit.*
- 6 勝気で誇り高いという点では, Basil も Minnie にひけをとらない。1例を示そう。次はカントリー・クラブの舞踏会の場面である。
To make him king here, she would have to reach forth and draw him close to her with soft words; but she only said, "Isn't it wonderful, Basil? Did you ever have a better time?" *Ibid.*, p.170.
- 7 ...she admired his strokes and once, when they were close at the net, she *suddenly* patted his hand. *Ibid.*, p.169.
- 8 *Ibid.*, p.171.
- 9 *Ibid.*, p.173.
- 10 *Ibid.*, p. 175.
- 11 *Ibid.*, pp.175-176.
- 12 *Ibid.*, p.176.
- 13 *Loc. cit.*
- 14 *Ibid.*, p.169.
- 15 *Ibid.*, p.178.
- 16 *Loc. cit.*
- 17 *Ibid.*, p.179.
- 18 *Ibid.*, p.180.
- 19 *Ibid.*, p.179.
- 20 *Ibid.*, pp.180-181.
- 21 *Ibid.*, p.166.
- 22 *Ibid.*, p.183.
- 23 *Ibid.*, p.170.
- 24 *Ibid.*, p.182.
- 25 *Loc. cit.*
- 26 *Ibid.*, p.183.
- 27 *Ibid.*, p.184.
- 28 *Loc. cit.*
- 29 *Loc. cit.*
- 30 *Ibid.*, p.185.
- 31 *Loc. cit.*
- 32 *Loc. cit.*
- 33 *Ibid.*, p.92.

(昭和53年9月30日受理)